

5 衣服については、八月九日戦闘に参加した時の着たままで、夏服のみで寒さには苦しんだ。防寒具を若干補給されたのみで、下着には特に困った。

6 作業のノルマはそれほど過重とは思わなかった。普通の体力であれば八時間かけたら可能な内容であった。

七、帰還

昭和二十三年六月二日カザンを貨車で出発して、ナホトカに集結した後、第五梯団として「英彦丸」に乗船、七月二日舞鶴港に上陸して復員となる。船内は至って平穏であったように記憶している。舞鶴港の栈橋で婦人会の方に、日の丸の旗を振って「ご苦労さまでした」と言われ、お茶の接待を受けた時は「これ本当か」と思った。

八、帰還後の生活

1 昭和二十三年七月復員後、休職のままだった大阪中央電信局に退職手続をした。

2 昭和二十三年九月十七日、当時の七栗村役場

に奉職。その後昭和三十年三月市町村合併により久居町役場。昭和四十五年八月市制施行に伴い、久居市役所に職員として継続して勤務。昭和五十五年十月、久居市教育長の職を最後に退職した。その間順調に過ごすことができたことを感謝している。

3 現在、全国強制抑留者協会三重県支部長の仕事のほか、各種団体、機関の役員を依頼されて東奔西走している毎日である。

シベリア抑留記

三重県 東 真道

一、出生

大正九（一九二〇）年十二月十八日、飯南郡漕代村稲木（現在 松阪市稲木町）
「永木寺」、父大野法運・母たまの次男として出生。

二、進 学

松阪商業学校、昭和十五（一九四〇）年三月卒業。

三、職 歴

昭和十五年四月～昭和十七年一月、川崎航空機製作所岐阜工場に勤務。

四、軍 歴

1 入 営

昭和十七年二月一日、第七航空教育隊入隊（浜松市三方原）。基礎教育と特字教育の二〇ミリ対空機関砲の実習を受ける。

2 転 属

イ 水戸陸軍飛行学校入校、甲種幹部候補生の教育を受ける。昭和十七年九月～昭和十八年一月

ロ 第三九飛行場大隊に転属（満州牡丹江省寧安県温春）。昭和十八年二月

ハ 航空地区司令部付（三江省佳木斯）。昭和十九年十二月

二 第一四航空地区司令部付（牡丹江）。昭和

二十年二月

ホ 原隊（温春）に復帰。昭和二十年三月

五、終戦時の行動

昭和二十年八月九日未明、ソ連軍侵攻。

本隊は温春より敦化へ転進したが、私は残留隊の隊長として指揮をとる。

昭和二十年八月二十日、温春より敦化へ転進の命を受け、徒步行軍（四〇〇キロ、一週間）で敦化へ移動し、武装解除を受ける。

昭和二十年十月中旬、敦化より牡丹江郊外海浪飛行場に徒步行軍にて移動する。

六、シベリア抑留紀行

1 昭和二十年十一月初旬、「東京スコラダモイ」の声に喜び勇んで有蓋貨車に乗せられ牡丹江駅を出発した。

2 ダモイの望みが断たれ、失意のうちに列車は酷寒のシベリアの広野を進行し、ウラルを越えて白樺林のラーダ収容所に（昭和二十年十

一月下旬）収容される。

ウクライナ国境近くの半地下式兵舎で約半年位抑留生活を過ごした。ラポータは薪運搬、コルホーズ作業、道路工事等に従事した。

3 エラブカ収容所に移動

昭和二十一年七月末、ラーダからエラブカ収容所Aラーゲリに移動した。キズネール駅より三泊四日の徒步行軍にて広野の中を巡り歩いて、金のクルスの輝く教会のある街エラブカAラーゲリに到着した。

ラポータは原木運搬、コルホーズの農作業、伐採作業等に従事したが、途中より帰還日目で炊事中隊の勤務となり、炊飯、調理、清掃の仕事を行いました。

七、ダモイ

1 昭和二十二年十月初旬、エラブカより徒步行軍にてキズネール駅に向かい、ダモイ列車に

2 乗車し、約二週間位でナホトカに到着した。帰還準備を終了し、昭和二十二年十一月十七

日、「白龍丸」に乗船しナホトカ港を出港した。

3 平穏な日本海を航行し、帰心矢の如しの心のうち昭和二十二年十一月十八日、舞鶴港に到着した。

4 温かい接待を受け、感激の復員業務も終了し、昭和二十二年十一月二十二日、無事稲木へ帰着した。

八、その後

1 昭和二十三年五月結婚し、東姓となった。

2 「赤ちゃんセンターあずま」を経営し、現在に至っております。

3 おかげで健康に恵まれて平穏に過ごしております。